

堀 至以 Chikai Hori

「日常の中で日記的に描きためたドローイングを制作の土台とし、抽象的な絵画及び立体の制作を行っている。制作プロセスに着目し、あらわれてくるイメージやそのイメージの存在する場について思考している。時に迂回するように進む制作の中で得られる副産物を取り零さないように意識し、新しい発見を形態化していくことで、変容する可能性を内包した作品について思考している。」

2015.10.18 ステートメントより

制作過程の中で思わぬものに出会い、それをキャッチできることが制作の喜びである。

絵画と立体を行き来しながら制作を行うことは、自身の持っているいくつかの引き出しを大切に結果であるが、その行き来もまた思わぬものに出会える確率を上げる一つの手立てになっている。

絵画制作の土台としているのは2011年に描きためたドローイングである。制作が億劫になっていた当時、何の制約も感じず日記的に数ヶ月描いたドローイングによって、絵画が描けるかもしれないという気持ちを得る

ことができた。その中で経験解釈しなおしているのが2011年以降から現在までの絵画制作である。

立体作品については、これは幼少期に遊んだレゴの延長である。素材がレゴブロックから自分の収集物になったことが違いである。背景や構図を気にせず指先で考え、もの自体に集中する中で素材同士の組み合わせ方を模索している。

絵画、立体ともに上記で述べた「制作の喜び」をどう形にしていくかが制作のテーマとなっている。

搬入のとき、小島さんが出品作家4人の共通項として「隙間産業」という言葉をだした。集められた作家は確かに、隙間でも何かができる、むしろ隙間である方が推進力を加速させるタイプのように感じた。

集められればまたその中である役割をそれぞれが担う。同じ隙間産業でも個性の違いが見えて来るのは興味深く、そういったメンバーで空間をともにできたことは得難い経験であった。



〈 Fragment 〉
2014
112×145.5cm
キャンバス、油彩



〈 マニュスクリプト 〉
2015
65×33×27cm
紙、石膏、木材、ラッカー



〈 Tangle 〉
2015
227.3×181.8cm
キャンバス、油彩



〈 星の位置 〉
2015
204×150cm
キャンバス、油彩



〈 肖像 〉
2014
33×24cm
ビニール、ペンキ、インク



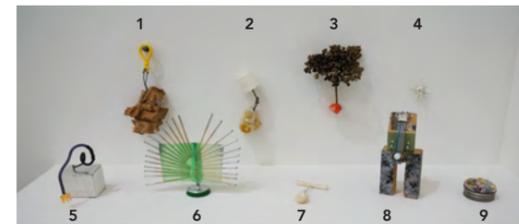
〈 diagram 〉
2015
91×72cm
油彩、キャンバス



〈 field 〉
2015
80×65cm
油彩、キャンバス



〈 field of view 〉
2014
23秒
ビデオ



1. 〈 キーホルダー 〉2013 13×6×4cm
プラスチック、針金、木
2. 〈 baggage 〉2013 10×4×3cm
キャップ、針金、布
3. 〈 plant 〉2014 10×9×6cm
枝、プラスチック、ゴム、金具
4. 〈 六等星 〉2014 4×3×2cm
釘、画鋸、ゴム
5. 〈 arm 〉2015 7×4×7cm
木、アルミホイル、コード、プラスチック
6. 〈 plant 〉2015 11×13×3cm
王冠、釘、養生テープ、つまようじ、ラッカー
7. 〈 some parts 〉2014 1×4×6cm
ストロー、針金、ゴム
8. 〈 Machine 〉2015 11×5×9
木材、コード、釘、ラッカー、アクリル
9. 〈 some parts 〉2013 2×4×4cm
金属、布、油絵の具

守本奈央 Nao Morimoto

2015年の文章まとめ。

- ・わかる、わからないとかさうゆうものではない。
 - ・もともと答えもないクイズ的なものも出題してないし、なんかたださうゆうふうになっただけ〜みたいなもの。
 - ・おほかたで豊かな絵が描きたい。
 - それらしいこと、は大抵それ自体と永遠に交わらない悲しさがある。近似値は近似値であって同じ値ではない。
 - 一点に焦点を定めることが困難で、どこにもピントが合わない状態。
 - 笑える肌ざわり/からっとしておもしろい/不気味で豪快/が完全に一致するときにたまにある。
 - 「自分にとっての最も正確なかたち」は精度の低い次元でしかつかめない。
 - なるべく真摯に絵を描きたいと思っている。
- 何かよくわからないものを作っています。よくわからないものだけで、自分にとってピンとくる判断基準みたいなものはあって、「こうじゃないとなぁ」という感

覚をたよりにつくっています。わたしの作品や、生き方に影響をおよぼしているなぁと思うものは、TVや漫画や駄菓子みたいな、よのなかのジャンクな上澄みみたいなものがほとんどで、2chの「意味がわかると怖い話」とかゆるキャラみたいなうさんくさいものが好きです。平面、立体を問わず、その都度自分の感覚にじっくり媒体で制作をしている。それらの作品が共通して目指すのは、「なんともいえない」「とるにたらしさ」などの、弱くかすかな気配を感じさせることである。そのために作品がなにものにもなりきらない状態をよしとし、絵画においても従来とはことなる、多面化した絵画を目指す。作品を物理的に壁から離すことで、正面性から絵画を解放し、側面や背面、本来ならそこはないことになっている部分もなにかしらのひっかかりが。

•「しいていうなら〜」という言葉はやはりよく使ってしまうのだが、あれはかっこわるいなと最近思う。しいて言うなよ！となる。



〈 たちはだかってるーみん 〉
2015
182×182cm
プラスチックダンボール、角材、ペンキ、油彩、音声



〈 タワー 〉
2015
可変
ボール、ボール、粘土



〈 テレビ東京 〉
2013
7.5×14×15cm
木片、油彩、金具



〈 ドラフトワン 〉
2013
8.7×5.5×3.5cm
木片、油彩



〈 アイルビーバック 〉
2015
53×45.5cm
綿布、油彩



〈 エンドロール 〉
2015
162×130cm
キャンバス、油彩



〈 天国 〉
2014
31.8×41cm
キャンバス、油彩



〈 オムニバス(急げ) 〉
2015
178×125cm
木片、油彩、その他
※上部の絵が開きます。
白い取っ手をやさしく持って開いてみてください。



〈 かまぼこ 〉
2010
50×13.5×14.5cm
樹脂粘土、アクリル



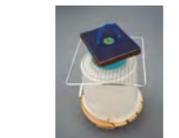
〈 miroku 〉
2015
45.5×38cm
キャンバス、油彩



〈 オムニバス(いのち) 〉
2015
可変
綿布、油彩、その他
※絵が開きます。
取っ手をやさしく持って、開いてみてください。



〈 かまぼこβ版 〉
2013
可変
マスキングテープ、油性ペン



〈 500円たち 〉
2015
可変
キャンバス、油彩、その他

MAT Exhibition vol.2

絵画の何か

Something of Painting

2015年11月13日[金]—12月26日[土]

出展アーティスト 川角岳大、小島章義、堀 至以、守本奈央

企画 佐藤克久(美術家)、Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]

ただ良い絵が見たいだけ、描きたいだけ、のはずなのに！

“描く事が生きること”に直結している人を除いて、作品を作る必然はどこから借りてきたような言葉や生活の中から見つけたものごとで取り繕い、それが自分にとってのリアルなのか(と思ひ込むか)、アトリエ内での制作のやり取りから得た実感を原動力にするかのどちらかです。このシリーズは“描く事が生きること”に直結していない人について考察します。経験をもとにした「実感のこもった画家の言葉」は、特別なように思えるのですが、ある程度の経験を積んだ画家同士なら共有できる感覚です。この画家の感覚をオープンにすることで、取り立てて特別なことではないということと、特別なことが見えてくるかもしれません。共通認識から先の“ある境地”に向かうためには、もはや一人きりで立ち向かうのではなく、多くの経験と言葉を共有し、特別なことを拾い上げ、それらを推進力にして未だ見ぬ絵画を目指せたらと思うのです。それとも一つ、自分と作品のやり取り、共通認識をベースにしつつ外部からの“何か”を無理やりにでも導入しないと、似たり寄ったりな現状を突破出来ないのではと思ひ当たったのです。“何か”は理念のようなもので、たとえば「アニメを取り入れる」とか「美術史に寄り添う」といった交換可能なコンセプトなどでは無いように予想しているのですが、今のところ私にはワカラナイのです。このシリーズでは、導入する“何か”が何なのかを探る意味も持つのです。

絵画を中心に展覧会を企画するシリーズ「絵画の何か」の第一回目として「何か=次元」と仮定し、川角岳大、小島章義、堀 至以、守本奈央の作品を展示します。

この4名は世代も制作場所もそれぞれ異なりますが、共通しているのは、絵画と並行して立体作品を制作している点です。素材や技法や思考の制約を軽々と飛び越えて、二次元である絵画と三次元である立体に取り組んでいます。彼らにとって当たり前の制作方法をひとつの共通認識として、形式を超えて地続きに広がる表現について考えていきましょう。

佐藤克久

トークシリーズ

絵画のタベ

「絵画を続けていくこと」2015年11月21日(土)18:00-20:00

田島彦彦(アーティスト)×山田純嗣(アーティスト)×笠木日南子(名古屋美術館学芸員) 聞き手:佐藤克久(美術家/本展企画者)

「種明かしと方法」2015年11月27日(金)19:00-21:00

花木彰太(アーティスト)×前川祐一郎(アーティスト)×天野一夫(豊田市美術館チーフキュレーター) 聞き手:佐藤克久(美術家/本展企画者)

「絵画のこれから」12月19日(土)18:00-20:00

本展出展アーティスト[川角岳大、小島章義、堀 至以、守本奈央]×島 敦彦(愛知県美術館館長) 聞き手:佐藤克久(美術家/本展企画者)

川角岳大 Gakudai Kawasumi

私を最も生成活動へと駆り立てるのは「自分以外の誰か、何か、あるいは自分の完全な中心との一瞬起こりえるかもしれない濃厚な同期」への絶大な期待とちょっとした絶望である。誰か、何か、私(自身)、との高感度な奇跡の受信一致、それを事物として現れ出す行動から私たちは始まったのではないか。きっとそれが絵画なのではと予感を持ちながら。

これらへの今現在果てなく尽きない興味を作品に変換し、何でもないものをつくり出す。それは受信の一致を起こす装置か、受信一致のものか。ただただ事物なのか。現れ出す行動なのだろうか、または何との受信なのかでもその都度変化していくだろう。そして、いつかはそれが絵画へと戻っていくと信じて。



〈+〉2015
パーテーション(270cm×360cm)×4
木製骨組、使い捨て発泡スチロール、梱包材



〈two〉
2015
41.0×33cm⇨27.3×19.0cm
キャンバス、油彩



〈I'm a dog〉
2015
116.7×91cm
キャンバス、油彩

小島章義 Akiyoshi Kojima

「oil on canvas」
いわゆる油画というものを描きたいと思っている。ところが、続けていくうちに手は止まり、頭の中では音を立て始め、それは四角い枠にはおさまらなくなっていった。絵の具やキャンバスなどの画材はおろか、色や形まで壁からせり出し、レリーフや立体などに形を変えていった。目の前にあるそれが平面からはみ出た変異体で、絵の仲間に入れなかったとしても、それでも私は油画を描きたいと思っている。



〈factor x〉
2015
可変
ミクストメディア



〈factor x〉
2015
44×16×6cm
キャンバス、油彩



〈factor x〉
2015
48×40×30cm
ミクストメディア



〈factor x〉
2015
79×72×14cm
キャンバス、油彩



〈factor x〉
2015
44×70×65cm
キャンバス、油彩



〈factor x〉
2015
31×25×5cm
石膏
グラフアイト



〈factor x〉
2015
44×44×11cm
キャンバス、油彩



〈factor x〉
2015
37×49×23cm
キャンバス、油彩



〈factor x〉
2015
34×32×9cm
キャンバス、油彩



〈factor x〉
2015
34×38×15cm
キャンバス、油彩



〈factor x〉
2015
44×40cm
石膏
グラフアイト